



パプアニューギニアに駐在して

松本 盛雄

前駐パプアニューギニア独立国特命全権大使

2017年6月30日

パプアニューギニアはオーストラリアの北、インドネシアの東に位置し、人口746万人、国土面積が日本の1.25倍と南太平洋の島嶼国の中でもひときわ大きな存在感をもつ国だ。特に2014年から始まった液化天然ガス（LNG）の輸出により、今後の経済発展がより現実的になっていることもこの国が注目される所以だ。私は安倍晋三総理大臣がその年の7月に日本の総理大臣として29年ぶりとなる歴史的なパプアニューギニア公式訪問を実現し、両国関係が新たな段階に入るという重要な時期に同国に着任し、約2年半にわたり勤務した。比較的短い在任期間ではあったが、日本人にあまり知られていない同国の現状と課題を目の当たりにしながら、できる限り両国の民間の交流促進に努力するなど大変有意義な時間を過ごすことができた。以下、在任中に感じたことなどを記してみたい。

ラバウルやガダルカナルといった地名を聞けば、多くの日本人が過去の戦争を思い出す。これらの地域はいずれもパプアニューギニアにある。太平洋戦争の激戦地であった同国には今多くの日本人が眠っている。その遺骨収集・帰還のために毎年多数の調査団が派遣され、慰靈巡拝のために訪れる人も多い。そういった過去にも関わらずパプアニューギニアの人々は、日本人が大好きで常に温かく迎えてくれる。それはひとつには相手に対する尊敬を忘れない日本人の心が、パプアニューギニアの人々にも通じているからだろう。また日本は1975年に同国の独立以降いち早く外交関係を樹立した国一つで、経済建設のためにODAを中心とする経済協力を継続してきたことも大きな理由の一つだろう。私が着任した年の秋、草の根無償資金協力で寄贈した小学校落成式に出席するため初めて訪問したマダン市の郊外で、現地の人達が民族衣装をまとめて歓迎してくれた様子は今も印象深く心に残っている（写真1）。ちなみに日本は、同国に対してこれまでインフラ整備や人材育成などのために累計約1800億円に上るODAを実施しており、草の根無償資金協力では地方の小学校、医療施設などの整備のために一件あたり1000万円以下のプロジェクトを数多く実施している。

初代首相マイケル・ソマレ・東セピック州知事は「建



（写真1）民族衣装で出迎えてくれた小学生

国の大父」と称され、パプアニューギニアの通貨である50キナ紙幣にその顔が印刷されているほど人々に慕われた指導者だ。国交樹立40周年にあたり、日本は同氏に外国人に対する最高位の勲章である旭日大綬章を贈った。日本との関係強化に長年にわたり心血を注がれたことに対する栄誉といえる。ソマレ知事は戦時中、父とともに生まれ故郷のラバウルから東セピック州ウエワクに移転した。日本人兵士柴田中尉という人がその地に建てた小学校で学んだソマレ氏は、今でも当時のことをよく覚えている。叙勲に当たり訪日した際には、柴田中尉の夫人とも再会した。私に日本語で「いち、に、さん」といって笑う姿はまさに慈父といってよい（写真2）。



（写真2）ソマレ元首相叙勲祝賀会にて

松本 盛雄

前駐パプアニューギニア独立国特命全権大使

2017年6月30日



（写真3）高校の民族舞踊大会

同氏は私に「この勲章は私個人に対するものではなく、パプアニューギニア人と日本人との友情の証である」といっていた。

パプアニューギニアの特徴を一言で表すとすれば「多様性」であろうか。4000メートルを超す山々が連なる高地と急峻な渓谷に隔てられた山間地域、熱帯の海にそそぐ幾筋もの河川とその間に広がる平地、海岸線とその先に点在する無数の島々など自然環境の多様さはそこに住む生物の多様性にもつながり、また住民も数百の異なる民族から構成され、互いに交流が少なく言語も異なるなど生物学的にも文化人類学的にも魅力に富んだ国である。私が毎年楽しみにしていたのは、首都ポートモレスビーの高校で開催される「民族舞踊大会」であった。異なる出身部族の学生たちがそれぞれの民族衣装をまとい各地のダンスを披露する大変興味深い催しである。自国の多様な文化を若者が引継ぎ大切に守っていく姿は我々日本人としても学ぶ価値のあることと思われた（写真3）。

現在パプアニューギニアは政治・経済的に大きな岐路にさしかかっているようである。政治的には独立40年あまりを経て、国民一人一人が徐々に自分たちの生活にとって地元有力者だけでなく中央政府の役割が重要であることを認識し始めている。今年6～7月に実施される総選挙では候補者たちがこの国をどのような方向に向かって発展させていくかをより明確に示すことが求められている。政府の効率向上、腐敗・汚職撲滅、経済格差の是正、治安・民生の向上など他の途上国と同じような様々な課題への対応も関心の的である。経済的には上記の通り、天然ガスの輸出が国家歳入の重要な地位を占めるに至り、経済の持続的成長のためにこの大きな収入源をいかにうまく利用していくかが経済的離陸のカギを握っている。一方、天然資源の輸出に大きく依存する経済構造では長続きしない。この収入が続いているうちに加工工業や観光を含む国内産業を充実させ、産業構造をより高付加価値のものに変化させていく必要があろう。私はパプアニューギニアの人々の楽観的な態度にとても共感を覚える。確かにこの国の持つ潜在的な資源と底力は、熱帯特有の強い日差しのように人々を前に進めていくことを可能とするだろう。パプアニューギニアは南太平洋の島嶼国におけるリーダーとして今後日本とこの地域の関係強化の中心的存在となっていくことは間違いない。その意味で、私はこの国の若いリーダーたちや、高校・大学の学生たちとの交流を一層促進することが日本にとっても重要であると確信している。在任中もそういった交流の一環として筝演奏、盆踊り、着物ショーなど日本の文化活動を中心とした行事を続け、これにより多くの親日的な人々を育成してきたが（写真4）、今後もそういう地道な活動を続ける人々に何らかの支援をしていけたらよいと思う。



（写真4）公邸で開催した着物ショー